

信じ、また知っています

ヨハネによる福音 6:60-69

（そのとき、）弟子たちの多くの者は（イエスの話）を聞いて言った。「実にひどい話だ。だれが、こんな話を聞いていられようか。」イエスは、弟子たちがこのことについてつぶやいているのに気づいて言われた。「あなたがたはこのことにつまずくのか。それでは、人の子がもといた所に上るのを見るならば……。命を与えるのは“霊”である。肉は何の役にも立たない。わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、命である。しかし、あなたがたのうちには信じない者たちもいる。」イエスは最初から、信じない者たちがだれであるか、また、御自分を裏切る者がだれであるかを知っておられたのである。そして、言われた。「こういうわけで、わたしはあなたがたに、『父からお許しがなければ、だれもわたしのもとに来ることはできない』と言ったのだ。」

このために、弟子たちの多くが離れ去り、もはやイエスと共に歩まなくなった。そこで、イエスは十二人に、「あなたがたも離れて行きたいか」と言われた。シモン・ペトロが答えた。「主よ、わたしたちはだれのところへ行きましょうか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます。あなたこそ神の聖者であると、わたしたちは信じ、また知っています。」

説教

イエス生涯の軌跡、足跡を福音書の記述からたどることはとても難しいんです。ただヨハネ福音書はほかの三つの福音書と違って過越祭（イースターの時期＝春）が3回、2章・5章・十字架の出来事、と記述されているので、それを元にイエスの足取りをたどることができ、ほかの福音書の記述とあわせて年表をつくることもできないことはありません。（ヨハネ福音はほかの福音書にくらべて、出来事の数が少ない、つまりほかの福音書との共通部分が少ないので、どうしても年表をつ

くるためにイエスの事跡をあてはめる格好になってしまいます) ヨハネ福音書の時系列によれば6章のパンの奇跡はイエス福音生涯においての二回目の過越祭の直後の出来事、十字架の出来事の約1年前の出来事ということになります。5回にわたって読み進めてきたパンの奇跡はイエス公生涯のガリラヤ伝道の山場といえるわけです。このあとの7章からはイエスの伝道の間はガリラヤからエルサレムへと移ります。

ガリラヤでのイエスの宣教活動はいつときは多くの人々が信じ、また弟子もたくさんでできたが去っていき、けっきょく最初の弟子たち(12人)になってしまった、ということがきょうの聖書朗読の冒頭に書いてあります。先週もふれた6章に登場してくる人たちの呼び方の変化、群集⇒ユダヤ人⇒弟子たち、このように呼び方を変えることで人数がへっていく様を表現しているのかもしれませんが。

一度信じた人たちがイエスから離れて言ったのはどうしてか? いまに生きるわたしたちからすれば、せつかく活けるイエス、地上に生きたイエスに出会っているのになぜイエスから離れる、イエスを信じないのか。(なんてもったいない)でも、これは「あとだしジャンケン」風な感想です。わたしたちはすでにキリスト教という信仰をもっているからこう思うので、当時ユダヤの世界に生まれユダヤの社会で生活しているならば、群集、ユダヤ人、弟子たちと同じようにイエスから離れたのかもしれませんが。

6章全体の主題は「イエスは命のパンの与え主である」です。この主題に関するイエスと群衆・ユダヤ人・弟子たちとの対話によってイエスが何者であるか、またイエスの使命が何であるかが明らかにされていきます。6章後半では、神が与えられるパンはイエスご自身であること、つまりイエスが命のパンそのものであると言葉が飛躍します。今日の福音は「わたしは天から降ってきた生きたパンである」と聞いて弟子たちのつぶやきが始まりました。

実にひどい話だ。だれが、こんな話を聞いていられようか。60 節

多くの弟子たちはこのようにつぶやきイエスから離れていきました。

サイババの圧倒的な存在感に、畏怖を感じているような状態で、彼に招かれ、彼の近くに立つことになったら、それだけでもう私はサイババを全面的に信じる心の準備をしてしまっただろう。そして「イトイ」と名前呼びかけられ、「おまえが心の清い人間だということは、私にはわかっていた」なんて言われたら、もう頼まれもしないのに額を床にこすりつけて土下座しちゃう。「おまえの探している宝は、見えないが大きなものだ」なんて追い打ちをかけられたら、勝手に埋蔵金のことを考えて驚いてしまうだろう。さらに「しかし、宝はここにあり、おまえの心のなかにある。それが、おまえにはわかっているね」などとおだてられたら、ねずみ花火のように部屋中を火ィ吹いて走り回っちゃうかもしれない。これだけでババ様は許しちゃくれない。「しかし、見えない宝ばかりでなく、おまえがその心をいつも強く持っているように、見える宝をあげよう」と、死者にムチ打つような歡ばせ方をするのだ。そして、目の前で指輪を「物質化」して見せてくれるはずだ。「おまえには、この色の石が似合う」なんてお見立てまでしてくれて、「大切なのは、ラブだ」とシメてくれる。こんなことをされて、サイババの信者にならないと自信を持って言える人間がいるだろうか。私は、正直言って、自信がある。必ず、信者になってしまうほうの自信だ。(ほぼ日刊イトイ新聞から引用 <http://www.1101.com/baba/>)

驚かせるつもりではないのですが、いきなりの引用ですいません。パンの奇跡を読んでいてふとサイババ(インドの生き神さま)を思い出し(わたしはパンの奇跡はサイババに似ているなあとふと思ひ、そうじゃないサイババがイエスをまねしているのだと思ひ返すというアホなことを頭の中でやっていました) ネット検索していたらこの記事を見つけました。サイババは20年ぐらい前にテレビで紹介されてブームになった人です。物質化の奇跡(指輪や神聖灰を出す)が当時評判になりました。聖書に戻ります。

そこで、イエスは十二人に、「あなたがたも離れて行きたいか」と言われた。シモン・ペトロが答えた。「主よ、わたしたちはだれのところへ行きましょうか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます。あなたこそ神の聖者であると、わたしたちは信じ、また知っています」6:67-69

長いパンの奇跡もこのペトロの告白でおしまいとなります。6章のテーマ「イエスは命のパンの与え主である」に対する残った12人を代表してのペトロの答えです。

ペトロの答えの重点は『わたしたちは信じ、知っている』という信仰におかれている。パンの奇跡を見てイエスを王にしようとした者たちは、イエスが真の食卓を約束したとき、背を向けて去って行く。彼らは『信じて、知る』ことができなかったのである。（雨宮神父）

きょうの福音を説教をするならば「信じて、知る」ことが重要で「信じて、知る」ことができない、とは問題だとなります。雨宮神父のおっしゃるとおりだと思います。だとすると糸井重里はどうしてサイババから離れ去っていくことができたのか。サイババから離れたことを非難するつもりはなく、わたしも良かったと思ひ賛成するのですが、サイババはイエスじゃないからというのは答えになっているようでなっていないでしょう。

シモン・ペトロは「わたしたちは信じ、知っている」と告白します。イエスを信じるというところはわかります。知っているとはなにを知っているなのでしょう。パンの奇跡を知っているということを差しているのでしょうか、それはそうでしょうが、それなら群集たちも知っていることです。ヨハネ8章にこのようなみことばがあります。

わたしの言葉にとどまるならば、あなたたちは本当にわたしの弟子である。あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする。ヨハネ8:31b-32

ペトロがイエスに告白した信仰、それはただ盲目的にイエスを信じるということにとどまりません。8章でイエスは「あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする」といわれます。イエスを知ること、真理を知ることとはなにか、どうぞみことばに聞き入り、あなた自身の答えを見つけたく

ださい。
